

(モーリー)  
**LIVE: MORRIE** 1992. 5. 26 日本青年館



はじめてからしばらくのあいだは演奏はきこえてもステージの上にはMORRIEの姿しかない。襟の高い白いシャツに黒のゆるやかなスーツ。長い髪は編んで一本に束ねてある。やがてステージ後方の幕があがり、ギター、ベース、ドラム、キーボード、サックスの人たちの姿があらわれる。大きな3つの銀色のパネルが左右の上と後方につりあげられ、ステージのふんいきが変わる。うまれかわれるとしても うまれかわりはしないこの世ですべてを燃やしつくすのだ 誰よりも速く誰よりも遅く 誰よりも速く近く なんにもなくなるその前に あなたがたはどうよこび

MORRIEは束ねていた髪をほどき、上着を脱ぐ。銀色のパネルがなくなり、スクリーンに空がうつし出される。

MORRIEがギターを弾きながら歌った。「あれからどれくらいたっただろう 砂漠の上歩きつづけ……ふり返って石の上には足あととはなない……石確かなものはいまこたけ…… 彼女はそこで待っていた 疑うことにはわかれはて くれが夢だとわかっていても 砂漠の外に出ていけな くれが歌うMORRIEを見ていて私は平衡感覚がおかしくなって眩暈がしてきた。MORRIEの歌の中の「ぼく」とか「きみ」という歌詞が感じさせるものは、まるまりぼくでもきみでもない。だから私も私であるという平衡感覚をうしなってしまふ。それは眩暈かするくらいなものなのだ。

会場全体をとりこむようなつややかな声で、溼うようにゆるやかに、いくつもの歌を歌い、「どうもありがとう」といってずうとMORRIEがいなくなり、ステージがおわった。

アンコールになって、ミラーボールがゆくりとまわりはじめ、光が銀色のパネルにうつる。MORRIEはメンバー紹介をして1曲歌った。

「やさしい気持ちで夢見ても 目覚めたときにはひとりきり。なぜだかさびしいこの場所は 孤独とよぶには広すぎる この朝出会った風景は 孤独とよぶには広すぎる」と歌って、キを回らしてまたずうとステージから消えた。ミラーボールの光の中しばらく演奏がつづき、そしてライブがおわった。実に巧みなステージ、はじめからおわりまで全部が意味をもっているステージだった。

**WORDS: HIZUMI (JURASSIC JADEのVo.)**

確かに私の発する言葉は、恐怖と不安と憤りを象徴するものとして、「死=DEATH」であるとか「殺=KILL」であるとか不穏な表現に充ちていますが、そういった負のエナジーを放出してこそ本来そこにあるべき「生」を取り戻せるのだと、それなしにはやって行けないほどの世の中は状況は屈折しているのだから、それ等を手取り早く解消してしまえる一つの儀式として私の表現はあるのだと考えていました。

そして気付いたのです。自分の(言葉、音楽表現、ひいては存在自体の)無力さ、非力であることをすべて認め引き受けたうえで、尚、求めてやまぬ内なる叫び声があるという事に。声を限りにその名を叫びたいという熱情、生きとし生ける者往けは往けと見えざる大なる波長にシンクロしてつき動かされる衝動、そういった鳴りやまぬ無数の慥かされたような強烈な想いがあるということに。

私は私自身が何者であるかを探るため、その年がかりのひとつとしてこれからステージに立ちたいと思っています。そのことが最終的に自らをも含めた滅亡を予想するに等しい行為となるにせよ、再生と平安を祈らずには居られぬ私という存在があることと、あなたのあの峻厳な自死によって何よりも気付かされたのだと是非お伝えしておきたいのです。

—— 心波新聞 Vol. 2 (1990年10月)より

(心波新聞は JURASSIC JADE 編集・発行の新聞、中味が濃くて読みおぼえ)

MORRIEの歌にはよく「死」という歌詞がでてくるけれど、そこから感じとれるのは死ではなくて「生の存在の確かなさ」。HIZUMIは死によって自らの「生命の叫び」をきいた。ティラノザウルスのヴォーカルの人から「生きて前進することの一つの姿を教えられた。時間を止めるくらいにその瞬間を生きて」

**LIVE: THE STREET BEATS** 1992. 5. 22 市川CLUBGIO



THE STREET BEATSのライブ、市川CLUBGIO。

ΦKIはステージで時間を止める。時計の針が動かさず一瞬前で針を止める。時間がどんとどんと針に向っておしよせていく。どんとどんと濃密になっていくその一瞬、THE STREET BEATSには「ためらい」が全く感じられない。ΦKIもSEIZIE ICHIKAWAもSHOJIも、持っているものを全て、全くとめらないうちに出してしまっている。あまりにもあたりまえに歌い、演奏をしている4人を見てると、いまこの瞬間、ここにいる4人のありのままを見ているんだと確信できるほどだ。

どういふうに演奏しようか、とか何を伝えようか、とかそういう意志が完全に消えて、ステージで4人でやっていることだけがあの4人の全てだ。と。それくらい自然でしなやかな緊張感だった。

市川CLUB GIOもそうだったけど5月15日の関内CLUB24と5月28日関内7TH AVENUEも前の方は5列くらいギュウギュウ詰めで踊っている人たちがいて、あとの人たちはうしろでみんな歌と演奏にまぎっている。

あれだけすごい演奏を、ライブハウスのこういう状態でもできるというのはほんとうにうれしい。

**LIVE: ティラノザウルス** 1992. 4. 18 渋谷ラママ 5. 30 吉祥寺バウスシアター

1989年9月10日原宿歩行者天国ではじめて見て以来2年半で何回もメンバーが変わり今回ギターの人も変わった。

4月18日、ライブのすこし前に、ラママの入口のボードにメンバーの名前が書いてあってギターのところに神田和幸(ex. MAGIC CARPET RIDE)とあるのを見てエーッ? とうか、こういうことあり得るんだ……。あー、夢、幻……。

このラママのライブ、とてもよかった。楽しかった。で、ティラノザウルスというすてきな恐竜はヴォーカルの人の意志で生かされているのだということがよくわかった。今度のギターの人は、NOBSとMAGIC CARPET RIDEで何回もきいたことがあるけど、この日からすてきなギターはきいたことがない。もしかしたらあれほど私が好きだった前のギターの人も、ティラノザウルスだから、あれほど私が好きだったのかもかもしれない……。あのギターの人がこれから別々のバンドでやると、それを喜ぶことがあれば、それがわかるかもしれないけど、もうギターをやらないのであれば、それを喜ぶことはできない。別にそれほどのでもないことだ。要はティラノザウルスはヴォーカルの人の意志で生かされているということなのだ。あのギターの人がいなくなっても、やっぱりティラノザウルスって感じたから。

5月30日バウスシアター。はじめて3曲くらい椅子にすわってしまう。演奏がつまらないからじゃない。歌によってティラノザウルスの世界を追いかけていくとギター、ソロになる。するといつまでもずうときいてきたギターとちがうから、想いがそこで断ち切られる。それがつらくて、椅子にすわって目を閉じたまま、下を向いていた前のギターの人の不在にばかり心がなつてしまう。気持ちのうしろ向きになつてしまう。いくつもの瞬間、いくつもの物語、いくつもの宇宙……。それが逆流してきて心の中で大きな渦になる。涙があふれてとまらない。こういう心のさまは甘美といえるかもしれないけれど、私は自分の心の時間を、何かの不在感やうしろ向きの気持ちで埋めたくはない。生きていくことも実感することでも埋めつくしたい。生きていくということには前を向いているということだ。だからこんなふうに向きになってしまうのなら、これからティラノザウルスをきくのはやめようと思いはじめた。そうしたらヴォーカルの人が「すこし前に出来た歌」といって新しい歌がきこえてきた。はじめてきくから世界が断ち切られず、不在感もなく、うしろ向きの気持ちにもならずにいられた。そうだ、私かうしろ向きになりたくないように、ヴォーカルの人もうしろ向きに前進をつづけているのだ。迷いが消えた。



この写真は殺したK-Iという生かすための手紙として書かれている。

いるΦKIを見ていて、私が大事にしているのは死んだ人の歌じゃなくて生きてライブをやっている人たちの歌なんだなって思った。死んだ人はもう歌わないのだから。